



早稲田大学総長 殿

2009年 7月 7日

所 属 商学学院  
資 格 教授  
氏 名 池尾 愛子 印

## 特別研究期間研究成果報告書

1. 研究課題： 国際経済学の歴史的展開—日本との国際比較研究—
2. 研究期間： 2008年 3月 30日 ～ 2009年 7月 31日
3. 研究場所 (国/都市・機関名)： アメリカ合衆国/ダラム・デューク大学
4. 研究成果概要 (2,000字以内)：

デューク大学では、2008年7月に The Center for the History of Political Economy (政治経済学史センター) が誕生し、もともとあったワークショップやランチセミナー、毎年開催される HOPE-Duke 会議が一層充実し、多くのトップレベル研究者との交流を重ねることができた。私の身分も、客員研究員のほか、上級研究フェロー扱いが加わった。

2008年4月のHOPE-Duke 会議は、「ロバート・ソローと成長経済学の発展」でソロー氏本人を含む経済学者、元国際機関エコノミスト、経済史家、方法論家、経済学史家等であった。会議では、1950-60年代の成長経済学が冷戦の産物であることが、参加したジャーナリストによって語られた。実際、アメリカにいるトップ経済学者たちが足並みを揃えて成長経済学やその延長にある開発(発展)経済学の研究に参加したばかりではなく、そうした研究を推進・奨励する原動力にもなっていた。アメリカの成長経済学には理論、思想、実証、認識論に及ぶ知的考察が凝縮しており、経済成長と貿易の諸問題が一緒に論じられていた日本とは大きな相違があることを痛感した。

ワークショップでの報告者は学外の研究者が多かった。20世紀前半の優生学研究や進歩運動、後半の自由主義思想(libertarian)擁護の歴史的研究、シカゴ学派研究が過去10年ほど流行していたといえ、2009-10年あたりにかけて、現代アメリカの形成に寄与した思想についての研究成果として公刊されるであろう。これらと並行して、「科学研究がアメリカの活力の源であり、先端研究こそがアメリカを支えていくのである」といった意識(American Exceptionalism)が、社会科学分野でも共有されていることが伝わってきた。また、社会科学や思想、歴史の分野では、(歴史的)優位性を主張するヨーロッパの研究者たちとの厳しい緊張・対抗関係が長年続いていることも感じられた。ワークショップ報告者たちとの議論が契機となり、私自身、シカゴ大学資料館と連絡を取り、プリンストン大学資料館を訪問・調査するなど、アメリカの経済学・国際経済学についての研究を進める貴重な足がかりをえた。国際経済学の歴史的研究は時間をかけて続けていく覚悟を決めた。

